

無邪気さと気高さ

子どもたちから芸術家まで、心を捉えるライオンの魅力

長倉かすみ

動物の匂いまで描くと言われた竹内栖鳳。丹念な観察により、その本質をつかもうとする彼の姿勢は、動物園の飼育員の日常と重なる。栖鳳の描いた、物言わぬライオンの絵を再び観察し、彼が感じた動物の魅力に思いを馳せてみたいと思う。

創世記の動物園へ

栖鳳が一九〇〇年に渡欧した当時、世界には一三〇園ほどの動物園があり、そのうちの約半分がヨーロッパに集中していた。日本では、一八八二年に上野動物園が開園していたが、ライオンが初めて展示されたのは、一九〇二年であった。当時の動物園がヨーロッパに多かったことは、珍しい動物が植民地から連れてこられたことが現代の動物園の起源であることに端を発している。例えば、栖鳳が訪れたと言われるベルギーのアントワープ動物園「図1」は、ベルギーが植民地支配をしていた当時のベルギー領コンゴ（現在のコンゴ民主共和国）の密林の奥深くで暮



図1 1801年のニューイヤーカードに描かれた「捕食者の宮殿」。左手前がライオンの展示。1967年に取り壊されたので、現在は見ることはできない。提供：アントワープ動物園

らしていたオカピを、世界で初めて公開したことで知られる動物園である。

動物園のコレクションは野生個体から始まっているが、現在では種の保存の必要性がなければ野生からの新規導入は行っていない。現代の動物園では、飼育下繁殖に取り組み、世界中で個体を交換しながら遺伝的多様性の保持に努め、調査研究および教育活動に力を注いでいる。

ライオンの魅力

現在、世界には一三〇〇園以上の動物園・水族館があり、毎年七億人以上の人々が訪れている。日本は今や動物園大国で、およそ一六〇園を有し、年間入園者数は七〇〇万人にも上る。日本の動物園で見られる動物種は、哺乳類だけでも四〇〇種ほどある。これだけ多くの動物種を直接見る事ができるようになった現代においても、ライオンは非常に人気がある。私の所属する横浜市緑の協会が管理運営する横浜市立動物園の昨年度の来園者調査によると、よこはま動物園では、オカピ、インドゾウに続き第三位に、野毛山動物園ではキリンに続き第二位にライオンがランクインしている。

ライオンが人気を集めるのには理由がある。ひとつ目は、典型的な肉食獣としての形態的な特徴である。ライオンなどのネコ科の動物は、まさに襲いかかろうとする獲物との距離を正確に測るため、目が顔の正面についている。獲物を捕らえる際には、獲物の喉元に深く噛みつき、気道をふさいで窒息死させる。大型の有蹄獣に絶命するまで噛みついていくためには、強靱な筋肉が必要である。噛みつく力を増強させるため、ネコ科の動物では頬の骨が横に張り出し、筋肉がより多く付着できるようになっている。このため、ネコ科の動物の顔は丸くて目がくりくりとしていて愛らしく見える。「図2」

ふたつ目は生態的な特徴である。ライオンはネコ科の動物の中で唯一「プライド」と呼ばれる群れで暮らす動物である。このような社会性が影響するののか、以前、私がライオンの飼育に携わった際、他のネコ科動物よりも好奇心を素直に表現している様子が観察された。飼育員が通りかかれば、ガラス越しに飛びつき、ボールをぶら下げると猫パンチをするといった彼らの行動は非常に魅力的であった。



図2 正面から見たライオンの顔

戻ってきたボールが顔にゴツンと当たり、面食らった表情をしているのを見た時には、これで獲物を仕留めることができるのか、心配になってしまったが、獲物を目の前にすれば彼らは捕食者へと豹変する。ライオンは、頭を低くして息を潜め、じっとチャンスを待つ。しかし、先に房のついた尻尾はまるで別の生き物のようにひよこひよこ動いてしまう。抑えきれない興奮が尻尾から溢れ出てしまうのである。百獣の王と言われる威厳と無邪気な一面がライオンには同居しており、いつまで観察をしても飽きない。

栖鳳が見たライオンに出会う

栖鳳はいつかライオンのどこに魅力を感じたのだろうか。本展に出品されたライオンをじっくり見ていると、栖鳳が見たライオンの魅力が伝わってくる。

一九〇一年に描かれた、ぐっすりと眠るライオンの絵「図3」では、ライオンを眺めている私たち自身も一緒に眠ってしまいそうなような、心地よい空気を感ずることがができる。ライオンの寝相には、足を曲げて仰向けにひっくり返る、横になり足を伸ばして寝るなどと多様なバリエーションがある。一日に二十時間眠ると言われるライオンだけ



図3 竹内栖鳳《獅子》右隻部分 1901年 個人蔵



図4 竹内栖鳳《獅子図》左隻部分 1904年 大阪歴史博物館蔵

に、寝ているライオンに遭遇する確率は非常に高い。この絵の中のライオンは、お行儀よく座ったまま、頭を乗せやすいように前足を重ねて寝ている。尻尾も開放的にまっすぐ後ろに伸ばしている。暑ければ、お腹を出し、口を開けて寝るだろう。寒ければ、尻尾もしまつて、小さく縮こまって寝るだろう。絵の中のライオンは、座っているうちにそのまま寝てしまったように見える。そして、ふわふわとしたたてがみが心地よい風を受け、時々尻尾もふわりと動いているような、そんな想像を働かせてしまう幸せそうな寝顔である。当時からライオンは非常な人気を誇っていたため、檻の前にはたくさんの人々が集まっていたことが想像される。そんなことも気にせず、ひたすらに眠っていたであろうライオン。そんな王者としての風格が、栖鳳の心を捉えたのかもしれない。

一方で、一九〇四年に描かれたライオン「図4」は、ダイナミックな動きを見せている。大きな足、ごつごつした顔、大きく開く口などの体のパーツは細かくライオンの特徴を捉えている。一方で、不自然な前足の返し方や跳ね上がるような動作など、動きには違和感を覚える部分がある。ライオンは狩りをするために走る。最短距離で走るためには、常に前方に重心を移して走る必要がある。そして、追いかける獲物を確実に捕らえるためには、体の前方に前足を投げ出し、鋭い爪を獲物の皮膚につきたて、動きを封じ込めなければならない。

当時の動物園では、走るライオンを見ることは難しかったことが推察されることから、このライオンの動きは、ライオンではなく、人間になぞらえたようにも見える。飛びかかっているライオンの身のこなしは、まるで武術のようである。これは私の安易な想像に過ぎないが、強さの象徴としてのライオンと武術は、栖鳳の中ではつながっていたのではないだろうか。広い草原で地平線を見つめるライオンは、動物園でもじっと遠くを見つめていることが多い。この気高い視線の後ろに隠れる猛々しい捕食獣としての本能を栖鳳が感じとっていたからこそ、このように躍動的なライオンが描かれたのかもしれない。もしも栖鳳に会うことができるのであれば、ぜひ聞いてみたい。

栖鳳の訪問からおよそ一〇〇年後の一九九九年に、私はアントワープ動物園で初めて出会うオカピの優雅さに心を奪われていた。動物園は今日も世界中で、人々と動物が出会う架け橋となり続けている。

(公益財団法人横浜市緑の協会 動物園部動物園調整課担当係長)

*栖鳳はアントワープ動物園でライオンを見たと思われるが、スケッチをしたのはロンドンの動物園であるとの説がある。